



経営(継承)のツボ

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

エントリーの魅力

昨年11月22日、日比谷公会堂(東京都千代田区)で「第五回介護甲子園(主催:社団法人日本介護協会)」の決勝戦が行われ、愛媛県松山市から直行バスで主宰塾に通い続け

用者の笑顔の背景には、スタッフの頑張りがある。この姿を伝えたいという思いから、介護甲子園にエントリーすることにした。自分たちの仕事は建築物のように形とした残るものではないが、文字にすることで形になり、振り返りに

転期に立つ経営の視座 初志貫徹

たGさんが所属するグループホームが、4度目の挑戦(過去2回二次選考進出。2度のベスト30を経験)で見事最優秀賞を受賞した。心からお慶び申し上げます。
「介護甲子園」の広報誌『介護応援隊』の特集「エントリーして介護業界を盛り上げよう!」にて、「ご利用

つながるだけではなくモチベーションも高まる。私たちが日々、認知症の方に元気を出してもらえよう触発しているように、介護甲子園の舞台に立つという目標設定が職員の触発にもつながる。ベスト30の賞状をもらった時、ご利用者から「良かったね」と喜んでいた

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。『介護ビジョン』編集委員。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「99の言葉の杖」(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

ビハーラケア

医療は治療の場、介護は生活の場と、目的は異なるものの一つの大切な命と向き合っていることに違いはない。その大切な命と向き合っている介護職員の代表として、自分たちの姿を伝えたいと、4度目の挑戦で日比谷公会堂の壇上に立ったGさんのグループホームは、2002年の開設からこれまで34人(昨年10月5日現在)の入居者を看取ってきた。

看取りの後、家族と職員が一緒に入居者を入浴させる「ビハーラケア」(死後の処置ではなく心の整理をするためのお別れの儀式)*を提供している。

お風呂で体を洗い、洗面、生前お気入りだった服を着ていただくなど、最期の場面をとて大切にしていく。亡くなられた直後で気が動転している家族は少ないものの、感謝の気持ちを込

めて体を洗っていると、昔話やエピソードに話が咲くそう。

ターミナルケアは、特別なものではなく生活の延長であると考えているからこそ、死後の処置ではなく死後の入浴が生まれたという。

グループホームは生活の場所であり、人生の最終章を生きる場所でもある。認知症になり、さまざまなことを忘れていく日々のなかにも、「笑いや涙を忘れず暮らす」ため、「自分らしく生きる」ため、次の3つの取り組みを大事にしているそう。

①できる力を仕事とすることで役割をもって生活し、生きがいにつなげている。
②生活のなかにも夢を持ち、夢の実現に向けてアプローチしている。

③最期まであなたらしく過ごせるよう「しとけばよかった」ではなく、してよかったと思えるかわりを大切にしている。

「生の質、死の質を高める、すなわち一人ひとりの心の質を高めるケアのあり方」が、観戦者から高く評価されたのではないだろうか。初志貫徹から5年、成し得た偉業を実感するのはこれからだ。

*Gさんが所属するグループホームの理事長で医師の藤原壽則と杉田暉道の共著「今なぜ仏教医学か」(思文閣出版)には、「1985年、当時佛敎大学の講師をしていた田宮仁(現・淑徳大学敎授)が、仏敎を背景としたターミナルケア施設の呼称としてビハーラを提唱した」とある